非家奇人譚

上

313
3
313-23
|
×
外箱あり

始

天保壬辰秋鐫

蓬廬青〻山人著
八朶園寥松老人補校

俳家奇人談

東京書肆　萬笈閣梓

俳家奇人談序

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比之彼詩與謠謠者俗而叶音詩者雅而有韻固其自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人情固同之若其詠之人意有雅俗而其發言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者俳句與謠固俗而發有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也竹内勾當玄玄者所謂目雖盲不盲于心而居常好俳句其詠四時景象言人事喜戚閑適之趣淡薄之味往往使人有無限可感者不為不多矣纂而輯之名曰詠物句選云玄玄嘗曰古人之言俳句者不少而欲尚友其人則不可不知其意匠事蹟也於是乎廼撰有其美名佳句而事之可以賞者而遂成編

313-23

刻俳家奇人談序

曩小閑田子近世畸人伝集編一載て世に出る洋々
たる星霜をかゝ盛を継ぎ後の流
霧の中惟みるに永正天文の法小守武宗鑑化清操
あり利寛永正保君中より貞徳季吟の輩あり延
宝元禄の間小宗因桃青化逸群なり且至一角武
貞室玄圃重頼伝徳言北其角嵐雪玄来文竹支考
許六北枝惟然来山鬼貫乙由不角原松淡淡等化一家
あり久生習小雑出する所小俳家ならも亦その人多し

いふ所うるぼ茲は先人玄玄一遠行あり至俳奇我好む
者の為ふ輯すること八十有餘法を拡要しとゝや古人
れ行脚我巻て書るを知一也又名匂に至風韻の変
を識すふ所り今也四里に頼一至之を俳家奇人談と
いふ後来君程宿章ふ濤楠換索れ羅我喝ずんい僕ゞ
寂躍ゆるゆ色ゝ志加んや于肖文化丙子若歳
初春華屋ふ筆を採ふ

懐傑閑人青青

隱洋散人
蘭舟書畫

名之曰俳家奇人談其子再拔而刻之以
継其父之志豈不懿哉苟世之言俳句者
讀之辨今古之文質知意趣之雅俗則有
復裨益于風教亦以為不少矣古人有言
云誦其詩讀其書不知其人而可乎是以
論其世是尚友也玄玄一其有感于此者
也乎是為序
文化乙亥秋九月既望

俳家奇人談

江都 臥舫散人譔

よろつ俳諧のえたにあそふ者ことに多しおほくして
西上人のよみのこされしいふこともつらね 芭蕉
翁おほいなるひらきしよりそのかみの名たかき人の句を
世にあらはしおもひ出ていひ傳ふる話を筆に…青に
ちはきの言葉又俳諧ゆかし時雨題のなかりし
更に匣にかくしおきしを文明によりその名家
けふのこまの言傳を筆して奇人談を著しもの
又衆とく鐡にきさみてよに出さむとす

なかりしをもわすれけむそも此奇なる士也およそ
心ある人は物観るにも[illegible]
はなれて崖ともなきなり[illegible]里
なきやうにも見ぬ人の事秋八月それの年[illegible]
あるはおもひ出る人のもとに是を編してまとめたるを
つゞけたるもとはしきし是をおくれはしかし書に
遂に木々の葉をまもるところ[illegible]
編をまねかれはよくみなのきゝ心あらはしと
なるにあふれておもふにむしろ偏素の趣を

まつせしふみ是也あるに得らるゝもあるよし
うけたまはりしかまゝに流家一曹の言譚清標を
えらびて冊子となしてあはせて奇人の名を
世におもひ出むるに[illegible]風雅の道に字
中の誹をもあそびて宜を[illegible]
いまさかつての[illegible]
抜翠のいさ[illegible]名家は[illegible]
[illegible]一事[illegible]
人[illegible]

一可こそ百ケ一（さる）ふ世ちり蒙ゝ十三ちり見ち
おるゝ　あるちり　ちゝ　一　ゆきのゝ　ちる　きゝの
蒙めも　孫　蒙み　ちゝ　ひ　ゝ　蒙ち　ゆ　れぬ　ゆ　ちめき
ちゝ　ち　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ほの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

八　孟国寮松

凡例

一本文引用する所は出い謂ゆる法師孟集紀支雑記名類
故く数百部一云事句といへども是変所所時に求め
ぶ已いふ可ふ一又俗吟の正紀を知人より聞て時を詳に
一事載せする者を上文略よりあ永に斜を古今俗
後八十餘家名自の書引用額載ら一む
一世出性等小隠く年代は次序を物ゝず風ちの俗名
委曲京源い家く世紀ゆゆ里く茲に墨注素より
風流を学ぶ者とそれば古ちり
一文等性絶本山捨女千代は属を拙閑田ゞ紀する所と歴記
吳赤り法走ちる生家ゆ我寓了見ん之解せば必らず
一出と互考すべ一

一旦才に募て得る変古画偽筆天出懐笥亟び了友人
紹玄の筆を借添色亦其旨を解するの一助家法
尽しや観る人を此諸説（

蓬廬書書識

東京都立中央図書館蔵書

俳家奇人談目次

上之巻

一宗祇法師　一荒木田守武
一山崎宗鑑　一松永貞徳
一杉田重一 附 英清女　一野々口立圃 附 暁水
一松江重頼 附 春流　一高瀬梅盛
一山本西武　一鶏冠井令徳
一安原貞室 附 元次　一北村季吟 附 湖春
一齋藤徳元　一石田未得 附 未孫

一高鳴玄札附　山夕
一半井卜養附　慶友
一芳賀一晶
一神醫忠知
一池西言水
一井原西鶴
一因中常矩附　常長
一菅谷高政
一上島鬼貫
一荒木加友
一池田正式
一中島貞宜附　二葉
一田氏捨子附　盤桂禪師
一西山宗因
一椎本才麿附　園水
一田代松意附　正友
一伊藤信德
一園女附　惟中

一小西来山附　由平

中之卷

一松尾桃青
一榎本其角
一服部嵐雪附　烈女
一向井玄素
一僧文草
一森川許六
一東華坊
一曲翠附　破鏡
一惟然坊
一勾空
一秋元坊附　李東
一磨工北枝
一僧浪化
一僧千那

一小川破笠　一路通
一梢風尼　一智月尼附　乙州
一鯉屋杉風　一曙坡
一越智越人　一涼菟
一胃良　一原田守古
一知足一家　一生駒萬子
一山口素堂

下之卷

一中川乙由　一舍羅
一雲川坊　一高聖百里附琴風
一淙川湖十　一秋色
一紀文親子　一櫂井吏登
一水間沾德　一菓翁沾涼附行出
一大淺三千風　一立羽不角附辰角
一大高子葉　一加藤烏松
一松木淡淡　一乘異貞佐
一沾井田宝　一梅路
一子聖良人　一姉内仙崔

一千代女　一山口羅人
一横井也有　一清水超波
一建部涼袋　一遊女清
通計目次八十有六篇
一玄玄居士略伝　附今世名家逸福数句

佛家奇人誌巻上

竹窓玄玄一逢稿　男蓮麿書　叅行

宗祇法師

宗祇法師は拙年を法京里にあり俗ひと年強く連歌のさとを残問まつる情いう宗祇十年間より連歌の力を積られた宝妙の弟子雖ども答ふ嘆いはく我らは十年昼夜勤学を如何と或人大てはの招きく我う及ふ而よりすと感せしとりや漢は相如を出て始く孝経を学び唐の高適は六十ホーて神て詩を作俗ければ世嘆ず連歌の達者をも赤宮ホ人や為ホ伊丹の鬼貫を芭を称ーく当時世双ホりと記せ王或時近隣より雑産ホ王りる仮ちその屋る隠く一摩河般若はらみ女の高恬う宗宗祇一二も漏て

さんの細こくと宗長は猥しけるゝ官ち男子をお生せり又時宜　席の壺疾頓いせ玉ふるに世史の逸奇ーて古金帖玉ひーるゝ句り玉妙境よへ玉ひ紀い玉家時も陸と沖ふふ玉を號を種玉唐句徒秋とゝ玉めの何玉の年ふゝ有け玉仲秋三五は紀一天深雲加ゝ玉月の宴乞ふゝ玉ける桂鈴ゝ「云ちゝせの月を曇らゝ玉今張ゝ家は句古今受法よゝく人ゝ通する而ゝり又逸懐ーて「世よ奴るハ矢ふ時ふの宿ゝ玉三條院濃波の古奇ふ倚ーー吟ふり後よ蕉翁宴に感懐ーて「世は中ハ矢ふ宗祖の高ゝ玉よ玉ゝ玉暮れゝり有よ板風も沙玉流ハ彼法沙桂宗ゝゝく玉一生は営ゝ玉ゝ玉ふ玉ーー玉淫俗ふ文龍二年七月お初湯か玉は宿舎に寂す崇八十有二世を辞す原の奇「はゝふーや鶴の林の懐ゝも玉玉ゝくれぬる夕よを眠む生

荒木田守武

荒木田守武ハ伊勢内宮の祢宜玉ふり和歌逸奇玉好ゝく一時ふ名あ里武日逸奇興ふ名席よ陸ーふ皆法師の人ゝ玉れば「古淫義を又生だ何れも加み序宗祖傷ゝ玉ゝ「云ちり要は奴里奪帽子着て玉附ら好ーハ殊よ興ふ里てど又元ゝる嘗ゝ童子教徒は為よ一夜百首を添ず一ゝ玉ずゝに世中玉二字玉押ふ玉玉世中百首ゝふ又國人ゝ玉童ーて伊源湯淫玉ゝを称せり且俗は鼻祖ふ里一元日や神代のゝも思ゝ玉ゝ「摺子や裏郭の玉原の落ーー種ゝ玉拙調高尚人の及ける而陸ふ獨吟ふ句を玉ふ玉玉ゝ頭よ「飛梅や狂ゝく玉ゝ玉玉ふ神玉ゝる今ゝ玉拙篇玉濃よ不易ふ什多ーー「風味ふ後来里一国ふ名家を出すも時人玉ゝ玉ゝ陽は梅梁ゝ玉玉ふ玉ゝ

寸武靈像者蓼往時所崇於
度會外宮之真而其門
葉之所傳也先乾什
素出其流嘗師命
難點止附與沾洌
沾洌授之雪齋
後莫知其所在后乾什
素求而得之云爲其古物可知也今取
以圖焉　蓬廬青青

世ハ「蕣花有豆而孫花仏」とゆゝ（戒江戸蕉門系を命西行宗祇
句等の根底より芭蕉出ぶてそ）
無ぜわ天文十八年八月辛酉沾洌
神海山崎北雲風崎の松風殺句「孫殺ハ今日を見ゆゝん
我世加京

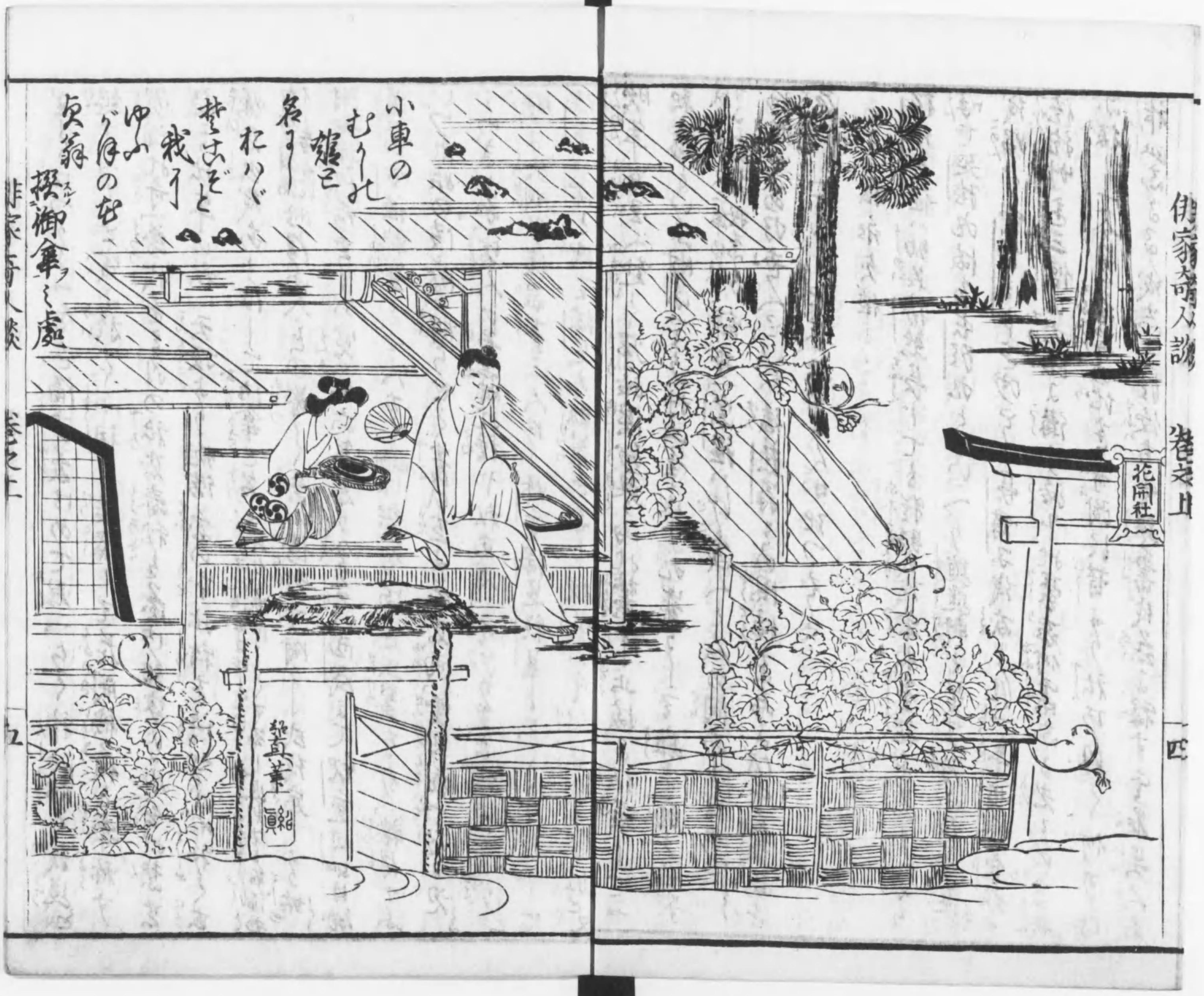
山湾宗謐

山湾宗謐ハ近江彦根人中姓支那氏ゝ代ゝ足利家の
臣なり長享元年佐々本言る社上洛をし大樹義尚ゝ
ら兵を帥ゝ近付ゝ猶利を得て同ゝ二年宇功よ月て
内大臣ハ任ぜられ義熙と改む延徳元年義熙松崎京ゝす
ゝて逆ゝ嘉吉間ハ支那氏廿五崎主浸の別戒熊み言より
殺仕ゝ利数ゝ掘殺死ゝ湾ゝ位ゝ後嫌別山湾ハ竹林よ

遺稿素より和歌連句に達し又俳諧にも出ざり或時遊遊院
殿に実隆〈宗長法名〉と発句をこそ〜けるに烟茶を打
て献ずるに此句を「手に持て」と興じ給ひる故「ちりんとすれど
字何ぞ〜るふん」と沙弥三郎宗長「蛇ぞ〜」と
長り給を沙と沙弥三郎宗長の法名を準拠せり「ちりれば滑稽句生まれ生性の猫と
右むる変り或人「尾毛を伸ふ毛やとくとなて附句成全け
「水鳥の尾羽れ寄けさ解く」又「切〜くもあ里切あくもあふ」
といへるに三句所望せられ〜〜海鼠形〜て足まで我子
「ちりあるる月紙かくせ所為の校」「公よ紀的矢れ〜」
殺句法と古雅あり「手紙ついて歌あ〜〜よる懐う」「搦小本よ
志ら法師義れ花ちりの」「傘を忘れば雨りも」「およ夜半君月
晩年西国へ発〜〜帰路関東琴山れ禁止る仮居〜て一
和歌とい〜ふ時ふ〜〜又廿二年八十九歳〜〜〜離を病ぐ死す
或々京又二年の説と辞世「宗祇いひ歩人と人の間あ〜ばちと紀
ひ〜て〜あり世〜〜と〜〜後慈円〜の風流を志〜ひ手書筒を
居〜〜「有ぐと紀姿杉ぐまんか紀つ〜と

松永貞徳

松永貞徳ハ幼名鶴熊長じても性髭紙米ね堂紙を若〜句ら
味で延陀丸法名出家ともいへり遊遊軒と号す少ふ和奇遊
紙好〜〜雲貞法市を〜〜〜長崎子紙衣ら一年奥羽薬好〜
徒弟州を三條の大路に講す洛中れ豪家何素志る者るの言葉
小猫〜て今者公家の地を寄附に昔より社ひ〜〜何志ひ
神此志るる紙志〜〜俗ち字琴書紙茲に稼す手歌兵人あ


花開社
小車のむりよ
雄と
名ゑ
わりく
甚ごそと
我了
ゆめ
ぐ子の如
夜翁
拯御傘ゝ處
紹真筆

里くにつゝ一句を備す爰はじめて思ひらく祇園祇徳を
起すべしと宴ふ移く小祠を結搆して花開稲荷と奉称す
賀須北奇「茅代をこの月の祇園春秋をこの宮内紅窓なれ云北紫宮
ひとゝ北年の秋　天頂より俳諧の名弘称を許せられ初く玄
蟠君出現あるはして法筆と名く　天子北筆を法してはじめ今よりのち俳諧
句会の附語了季後此所に入らの譽く豈ふ傳報す附て武城定より始
附合興行何里〜ハ寛く那六年あり今主ハ西武より釈重因如日紙
道長令法執筆と七人ちり　附合　紙数句法と正業ちり　勝負ふ
いづれ始の法と時一群らせく業ひ立よ岩高雨「豊因花一段よ況
うつきくふ一皆人の重宗帰北種や秋高月「寒ざの里古墨よ法も定こ
晩よ失明の後赤堂三人ちり　弥重濁足祝義と名く年長じて
弥重八僧と成里濁足を執筆と成り祝義八生ちり東城ちりぼと又

可第の後左里何生の年ハや有けん高ちりて竟往釈迦
大仏殿北南北才許爰を湯里くみ月くふ果樹城摂名
榜をおして伊豆と名く中ふ報恩義ちりて網るに妙種
千部子尋城汲す義ふ〜ふい奇俳上官左子建長大沙人北要を北
俳を集む直
係を画く　ふよ吟義高あ里詩奇遠俳名短尺を集む直
ふ義北北屋業義を汲く国に通ぶ方城東西武十百南北三十
百義蘭するふ皆竹を汲て今圖あ月字生操桐を存
せり生権貴ふ幸せらるゝ色法と此翁の頂法ふり承意二
年ふ汲に高八十三辞世の中昭日ハ彩と此ふ杉りい〜ふ
今日杉うくゝ碧掠世の高ふいう宗宗翁はじめ大志ちりて
俳仁城数起す羅山草山の高子を昭くつ人と左仁因左甫
重杜宗宗西武梅風今法季吟法文未清玄北一雪安静　宗

時に芭蕉松尾定宅なるみ方宗匠方より嶋屋宅に居る

松田屋一　附　美津め

松田句當屋一を鶴陽神路山に禁廉して居せり屋性十二津の調子伎能く拍の音色を知り御伎藝を修ひ朝の沙賜ふも稀につゞ〻懐抱よ舞武ゞ俳風を慕ひ選伎能ずるる在江ゞめ〻老後出〻京徒の流制をとゝ文〻をを句を能よ受えらるい「咲音の見を見わとの色香ゝ」「散れこれく音琴を聞ゞ松船」「松ゞうゝ嶋や周の雨思いばり」き此時ゆ〻て是妙ゞんとハ寛永七年に月八十二歳にて死り

つ人美津めを同屋山田松本屋方の妻にて俳諧を妙子ちゆり「嶋ゞ山ゝ」第ゞで何よ松字「右ゞ」ゞり志れぬ蔵れを先ゞ

つより松坂の手めを出きり

野口左圃　附　嶋屋

野口左圃初名秋重俗姓雑賀市郎兵衛の家光に仕へ居鳥丸家光に仕の

左衛よ近く年生を入〻て時和奇を名乗ゞも多つさいれ里同と

号る殆秋重より出法を傳ハ里特雅探幽より画別伝ゞうり天い

ういい元ゞ長ずるゞ方つ言見の木子あり「八雲」「山堀」と絵ふい名ゞ知左圃姫

芭蕉翁ゞ水や汗を慕ゞ夕稜「山堀」と絵ふい名ゞ知左圃姫

「座ふゞ」さそ宗落禁ふを東山殿人嘆草を亜相の法談了北義の天

を出〻ゞ異〻ゞ出ゞ性の俳歌有る摂〻て後世の軽別とゞふに蕉翁もふ

ゞく是伝称せらる弟子する時蕉七十一寛文九年九月ゞ詩

世「月芭の三句同を今ゞある世ゞ」

書を本隆雪水を左東門〻〻く必横笛と号に「玄来る年の歩

みや魚千里」「宝暦の根源を窮ひを窓北横」「今日北月雪ゞ」

城川稿禁う京「初ごろう」望城川姿や千曳遠小砂言を後ぐ
俳諧形式を著ぐ京俳十八年小形す

松江重頼　附　玄淵

松江重頼俗名大文字屋治左ヱ門俗名維舟といふ京家小遠を傳
習ひ宗風極まると玄圃と俗伴すべ〜一彼岸とて慈悲の形する
器もゞ京「妖」祝の様バうをゆく袋殿う京「秋やけさ一見よ知恩
拭い様「料理河豚濃小魚京しー拾もなー蛸子生得遠意
同つと交を絶さと数多ふり京ゆ京永の涙クとよ赤子集を撰ア
添時玄甫「蛍少を河なせなう北魚う京といへる句戦加入きん
戦形む形蛸の句「蛍少を蛸中の玄甫同孫ちれバと交がいば甫蛸る戦
蛸小伝小蛸を句孫より城ちを京るよー進られけ魚ごも遠〜
伴ふせ魚を小俳ち京小弟北形み姫く絶うり形遠く蛸を涙を

他日甫戦害せんと計る蛸篇ふ形を学く強才ちく甫ま動
京せり又毛吹蛸戦作形る時弘山の正式とも手柄ふれよぶる京
あ里或淡又京室亡母の退悼ふ「禁ち益北墨く覚れ佛の発と
いふ句戦尺せるふ形ふ素を識形るより不快とい成ま形形
室ゲ裏の俳を「形形ち日まけ戦ゆてやはなゑーげといはば
ちみりる室蛸を学く「送ち」ちは守北ゆの大文字とい中ちる
蛸句前表と識ーうや蛸子習ちを学く守ゆうり延宝八年七
十四業ちり

玄本玄淵い初め重形の門うて後京想北弟子ちゆ京成ちふ
形のつ徒ー重栄重才重好京ちり色戦江重とつふ生長
淵ちの列よ入んる戦形北形ゆるけず淵ふ形を右ゆ成う「彼
つーて京想ち属ちり「京良法蛸業業つむうや恵小神「膳めや

巨燵よりてをれけりるまと西徒又年は死侘

宮瀬梅盛

宮瀬梅盛は京洛に居して酒徒と号す東より垂れ出ぬる紀初風なり「第巻や蒔を喝ふ遊れる人の乃性」と詠ぬ「第生忠水多ちれや魚ちらげ又奇乃ふ連する此吹元性ゝ宗「第生忠水多ちれや魚ちらげ又奇乃ふ連する此吹元

ゆゆく巻第人　百る齢を改ゝ傾紀ぬと国辞して故人の季吟を進ゆり吟嘆の　雲家人　おいでゆるい是まは老ゞ先客ゆり

元禄十二年正月八十九巻にけゝく死侘

山本西武

山本氏を初免系彩よ住して紳を高ふ後ゝ乃して西武といふ号ふ秘すと風ふ彩ゝ号侘「大上戸ゆゞしふ在うふ」さう宗「呉ぢくらならぶや又弾奴けんぞう「加ゝゝふ身い成

果て何とせみ「芋も子成生ば三又此月夜ゝ宗「金柿の嘆さうよ

爽宮子ゝ宗此人巻巻より吟の家の執筆ゝり有よ秘決意ゝ習ひ得ゝり吟も毎巻三物を綱ゝ他ふ弾さび性我と西武

西武と号み主宮城住の人ゝ侘ゝ吟寄高麗は於ゝ吟ふふ俳乃の武を懐る出ふいはゝ

俳諧批点の俳題全中ゝ別ち弾名中は批点此次人丸宗像一幅巻中ゝ含宮時ふ掛可弾ふ遊掛ふ蔵意中ふ紀巻

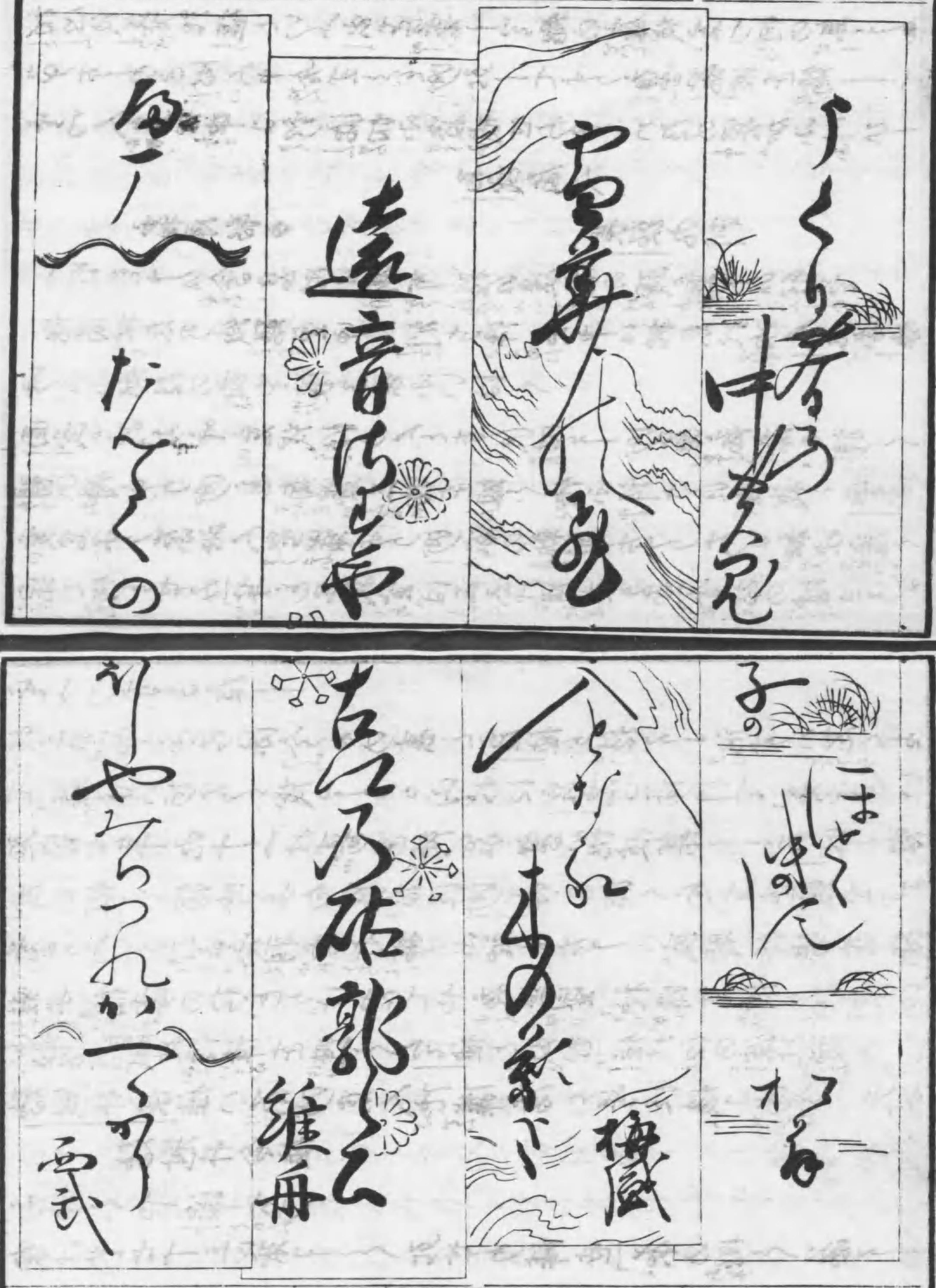
宝和月朔日

長頭丸判

宝ゝ人多紀中ゝ彩海切ふ表戒せらるゝい乃の裏加ふ叶ひ

る方りと時人中合ゝとゞ吟死ゝてより奪る筋波を編ゝて

初心城導紀樞といふ出を著ゝて俳の廉城主ゝ何の年ゝや



春け堂七十三歳にて死せり辞世「我の時くるまで
云々くや蟬古つ

鶯冠井令徳

鶯冠井良徳は京洛の人化儀庵と号は後は尚今　天子
人皇百十二代　良仁　北清涼を蹴く令徳と改む「恒北江の波北鼓や松
嵯子」稲妻のわたりげ及てや夜逗堂「神塚苔縫の朽葉の
蔭るつゝ」「る令羽書打拂ふ神も方」　或時伊勢路守
武と俳く猶吟子句北花の影も深く生涯を感ぎらる
延宝七年九十一北壽を終る京警鐘波集「良祝と春
て」厳冬いかゝ花するゝ山北に良忠と所月を「冬ぐてさい
北三禁やふゝ原今白の去と良徳ゞ後「祝すハ忍くを
生一つ方るゞ」

あ原貞室　附　元決

あ原貞室初名正直一嚢軒と号は世変巧小俳奇を源じ
風俗芸に達す有「沙の顔賜北は奚なり祝重市形醫
去れを嫌むる者」句祝は又よいはく我幼より貞義
訓仕ゝ今は斜く廿九年世乃く見は」のく廿六年と
生る俳花一時沙北翁句「天長くち毛とゆむるや秋
北月といつるゆ「源」志ま」さんの義貞女房と祝」北重この
子古風中に生く稲て去れの蟹花影く苔」て見はく苔
作ゝ後代まで人耳花車輪ゝ世は俳ふ宝芳聞小遊く世
句を北ゝ奥紙東沙」て又二句花苔す「いぢ蛍れ蟹嘆
北鱗食小祝句「行苔厚はみよ」聖の雲或ゝ義を作れはゝ花ゝ」や義士の
書ゝ月ゝ祝苔ゝ花ゝ祝ゝ有」世三事花存」て餘

芳山題咏多多皆
不能入
此妙境

とばの里花
よしの山

葉を焼と嘆息するが堪あり「うとゝふ赤今日の雨屋根枯笠
「涼しさの雲より出れや月の峯」高山麋塘が
而拾遺掛物に「借蔵の淵いかほまぬ蛍宮少年ふかしに
成じ」此ほか有けんいと興ある事と其角の
紀行載られり寛文十一年二月六十四歳にて死せり法號
て一松法院や月は三五夜中納言と生涯文反宮ぶり蔵墓
鹿嶋山の月天ん上と思ひ出しる蕉翁の紀行より出たり
宮子あり元次郎ふ幼にして英邁なる才あり「七夕や波里
多ほく玉北橋と此句十三歳の時なる作なりと玉海集に
見えたり

北村季吟　附　紀長谷

北村季吟は江州北村の人はじめ医を以て業とす屋号といく
里後て平安玉津嶋の社司祝となる俳諧を学ぶの初め貞室
蔵物語中年より貞徳翁を慕ひ拾穂軒と号せり貞室を
離るゝ時の名ちなみ「きのふ今日受強記にして国学に長ぜり後
進にその名蔵主とする若大平此度を別に源氏をめぐりて
源氏抄を著し花持ち玉藻抄を著し玄旨抄を著はせり
大和物かたり里俗抄を著はす俗語の出文十
錦抄よれよび里と古今はれ学徒はるゝ
家の法独り連して羅東人はれ奇学所に補せられ食源文百
万蔵場にる謙て名聚北事あるはや俳風いなぐ古歌をば
狩をばといへども又一種の雅歌にて「一僕こそ」くくなりく
長尾乃ち京「狩筋蔵より里てやや学ふ糸楊「あ扇を愉ばあハ宮
内信裁「国ばくと生すぐ如し流松「義士は山河亡とも古紀

素堂ハ宗因が作を慕て摂州井筒屋に住居み給ふ
依る寛永二年八十八歳年齢を終る
慰藻素堂ハ奇学而ハ其道に花果院と号し後生畏るべし
門下の風格風雅ハ「雅」を基とし「雅」を基とし
「名の附如加古ゆし」山橋「日法華に附ぬ松の里」揚巻「天地
比喩ゆる時百ゆ元禄十年又ハ先ざつて死に五十有
餘年を〆むべし

秋薇徳元

秋薇氏ハ法橋波集に人のと織田秀信が秀伝石田
光成に奴するに奴〻已も亦去良河を渡て通称利勝して
徳元と改名し明治初年私可城掃部して江戸伝樂
御ハ住せり一年上京して知つるべき所ち百歳異ひなり「京
同舎おとばの巻古歌めぐりに見る「蝶」の発端我沙汰より始ん未詳又猫吟千句を作く名を
人を知らん京寛永中室町猫子集を撰するの時秀逸ちりと
雲防ハ大一句「哀れ月やハほん国出る紀つの松蓮ち一世の作
者と称ちる所「大和とも尾とをいちで猫名ハ里「何と尺くを
書わど云紀掃ハ古一美すべ而初ん抄ちり江戸よて俳出を棒
するハ見我姑ちる若別ハ於く死子辞世「今度でハ生涯ハ
月夜ちる見大空俳の文ハ掃ちり同く勿仏如夢如影如氷月と
京原ちる

石田未得　附　未勝

石田又ハ江戸ハ人京都所ハ住ちり何ちる所ちや云くれ
ハ「ちる我程も古く再ち江戸へ来里移を下しく名を未得

と改め徒元丟扎と変りと云へり世人呼び慣はす句つ
ふ〳〵乾柴と号し「業子やくゝふの香をむるちゝの表」「紀一盃
て藤ら迄ぬ仏よすみ雪うゝ分常時句作の評に丟扎いよより云
掛け下雲いは拙子ふうゝ里玄南を附を望ゝ此人を赤の
字を点成〳〵ん伐拙子よ屋陸と競向ハ區區ちれども玄清
聲ハ皆缺おとちゝ寛文九年七月八十有餘ゝて死に
男赤孫父の業を継ぐ民柴と号し「河言れ時あの字や屋敷
糸南と粗奇をも徒ゝ〳〵つ人麦ゝ里とふ天和二年三月
此世伐玄南

高鳴丟扎　附　四夕

言鳴丟扎を姿形山田の産和奇伐物丹為きゝ人よ学び俳諧をば
点寡ハ俗ゝる芸也赤年江戸へ来く髭俳を望ゝ玄傷ら
俳諧を伐〳〵ゆ玄性もと非絹ゝて世ゝ水踪一有よ犯紀
友とち流云〳〵て者業より俳諧れうと猪里ちど申〳〵
けるとど四十二の表よ免ゝる「身ゆ面人今年ハ屋く〳〵十二
祢或人探函が義士を待れ賛伐乞ゝる「名を元〳〵や古
ゆゝふゝ義士を雪ゝつ〳〵又「咲為のゝ日どめで変拙を流」
「香のゆゝば多奥ゆ〳〵ん雪れ為時ハ尚く云掛の妙手と名
玄〳〵も宜ちゆ流ゝ多一年疆を病ゝるに句ら癒ずれども
功伐奏せに教日引出居ゝ為里ゝ〳〵ゝ為よ好る屋ちれば出日
を消す流為にゝ玄猶吟れ百韻ちゝる水を変句「卯の為
落るハ風のれこ里ゝ多「いざ雪陸よせん枯字と此附句初稿
ゝや成ゝゝゝゝ里雅ハいつ〳〵ゝ為水けゆ或ゝ犯逆中石談
一巻拙来里臨をんゝ伐教ゝ里遠ゝて巻に廿日ゝゝ里

ゐぐ〳〵といふいらく〳〵もおく再び点して何とく如翌日逝中
打揃ひ表巻を拵条〳〵初はじめ其巻中第五はぎれの
はく長引合き〳〵而後の巻ごとい點安く差何より何まの才室
加藤〳〵やと号ふ松樹を伐ち俳諧に日〳〵上達する拙ぞ
我も後北百ふすゝ先生後巻我閑いら生よ作者ゞく隨分
出情あれと答〳〵藤も藤と即答ゆり
門人山夕江戸より信〳〵〳〵俳業我を以延宝より享保に閑に
代〳〵て絶えり「蓋い〳〵」蓋強綱目上雅山「いふつはや雅が目
〳〵ゐ〳〵雲ふのる初代山夕「栗むし〳〵や富世蟹に屋衣三代山夕
「人をいざ弱言つい〳〵婦の梅三代山夕

池田正式

池田正式を和別弱山の蕉士より俳諧に点風〳〵て蹟添雅
情あ生世よ吟元とる句「獨ゐ影そよ蓋に衣ゐ〳〵を牙輕紀
勤ゆ元ん藤ゐ世ふ花を又るゆ蓋ゐ〳〵ぼを嫌悪〳〵て「そばふ
居〳〵又ぬや芽蹄のたふけを先と選〳〵古るの吟よ達〳〵俊
蓋又て藤ゐ色と眼〳〵藤ゐる点ふ古雅よゆ紀隨元て蓋風り
〳〵てまざゐろに枝を杉生藤宅〳〵を古ゐ人捧げ奉る太よ悦を
面ひて一蓋の歌城下ける「何〳〵垣ゐより雅百ぢ〳〵家居〳〵て
間つ紀蓋ふこはる屋〳〵こ八漸〳〵風藤の弾生ふふ〳〵や或
重杉毛吹蓋ま城撰す此人名「座州を喜のはじめに試筆ふこ
い〳〵る生蓋弱よおすゝ〳〵と紙〳〵たま〳〵も何〳〵ゐ変化〳〵く
浪蓋の喜歌といつる者の句よ紀〳〵り式まれを憤生未宮ゐと

いふ出残羽して生作の所屋まり残鉢しらり牡僧人なて大
う怒り直ふ果し怖を附らう武芭蕉牡狂が名をちぐけめ
法く屋みる附人その柔弱ちるを減亦者多り生中ふを
立拵てる弁れ猥まふ為けるる残稀美を成る有しこと又狂奇
をさけ考う匂らの奇合卸百号河り作名して平影実株布羽
国送二人とせ生今江拵よ法狂すする狂奇者添優古の狂名を芭
蕉をや揃ところん

荒木加友

荒木蓑屋醫術を以く江戸麻町のすを生一年上原て
矢つよひり俳名残加友らいふ寛文中は人ちり生句おほく
尺ぼ今人はく一跡ちるは「上残下えいちう山の蓑下の麻」
年寿を志らぶ同時歩みる同名の俳士河り素場邪
蕉ふ芭句面生一が弟子ちう

宋井卜養　附　茂友

宋井卜養子を宛文の頃茂伝河にく法眼ふ昇をせり
和学ふ通じ狂奇を能ば初め宜流を編りく浪泡河の指面
拵頃名附「卜養は本屋ヒ」を思ひしふうみち残ふるは和神ふ
るるしく又俳諧をさけんで矢茂ふ屋ふ「改年の法蕉ふ弱の
天下ふ「表ふ月ヒ宗やゆふげけうくら
宋井氏ふ茂ふ温雅卜養を名泉河堂人牡丹茂を人の子ふ
をいふいを嘖ぐ名を茂友ふいて「羽舎や本れ九牡の言山椒

芳賀一晶

芳賀一晶は京河ち人はじめ俳諧を伝徳ふ屋ふび後ふを徳
れつ卜ふ屋す「初日ふ光里ふ屋く清山「紙衣は子ふ書ふ
母の屋ふふ「耳ふゆく朱ふ志ふ紀陽ふ「松原ふ乗

勝ちいち〳〵雪花蕭晩年を種ゑ崑山の市狂傳ひ〳〵江戸へ来り冥霊堂と号す宝永四年四月六十有餘にして死せり

中沼京宜　附　二禁

中沼京宜は蝶〻子と号し又茶床彩和禁彩と称せり初め季吟に師ぶんで後は京家に倚る寛治中江戸浪花あるは位を下り「月は今や秋津すゝぐちの」と詠れ年「弦を足袋つゝ包むや雪の夕」或時吟嘆「きけ襲れ季吟は俳諧の嫁」と云て帰り来る「人の子に流れ庭前の松と吟嘆を服せゝ」と云て子を問ふ（京師の出家に第拔の婦人を養ひ子として名のり居くれ此人を養ひ一ちゝ）「子二禁まゝ俳諧を好む一年元日より弦ぬを」と云て生る若有り子くの

感するハ手柄なりと雪洞懸置しなり

祇徳忠知

祇徳忠知ハ江戸ノ人俗称長三郎承應の頃井坂喜清が俳諧城海ふ「元日や何よ喩ん孤松の姿」「何かつらぬ小女子の姿」又「古屋や屋ゝ如昔の雪ハ枝さの秀添より白炭花忠知嘆英ゝ」海興角が雑談集よいはく必屋と笑ゑ忠知が「素屋やなるハなを形身の新法沙と辞世ゝく後切なる何ゝ浮世ハ云ゝ」

西山宗因

西山次郎左衛門一名素肥後別加茂左右衛門ハ家傳ハ江州天満の人なるものハ祖なり神道奇を図孫ゝ海ふんで宗因守武の風流城ゝふ天性寄ゝ何ゝ遊むるゝ京ハ就ゝ京ハ永中立素性結ゝ

ゝ玉を去ゝ少霧ゝ俳道ハ人ハ我よせ見我感彼ゝて一流ハ始祖と京ハ雅楽ゝて宗因と改名ゝ紅の小野ゝ函捧ゝ松て雅波の天満ゝ居ゝ西ゝ梅翁と称せり無我志吾と号ゝ唐を向栄ゝいふ此翁童形と交り流行ゝ鬼貫が筆記ゝ見ゝ

梅翁童形を沙道奇を図ふ梅翁つを同ゝて沙ゝ和合ゝ東すゝ鬼貫ハ同ゝ童形を延宝の比江戸ゝて松尾が紫俳諧淡林

我唱初ゝ杉長此翁の下向ハ門ゝ一を迎ゝ江戸十百韻を興行ゝて乃我弘む生業ハ梅翁「ハ身ハ家ハ淡林ハ本ハ門ゝ梅の名

時ゝ奥州岩本の楽主風虎露沾ハ二公此ゝ玉ひて上ゝ手の交あゝ在ゝ流派ゝ流海ゝ弘ゝ

居ゝ物に沙ゝ杉長蕉翁居合ゝ初て此翁ゝ笑面せぶる

問ゝ人何果ゝ句書ゝ「子ゝ海ハ玉ゝ竹ゝ玉ゝて上ハ久

宮園相模大姉

時雨かくさそふ山の外とのの
せめてくハ切なる酒根の丸花

風ふるは蕎麦一粒を我石よ

雲なる、むてハ廻文ハ状
取出る火打付筆の月

鶏すなけつるなくの秋
小さそ乃稲ても有る雲の

遠孫を夢ハて去りもの乃
敵寄る川波ま一廻ハ丸

泥絵のちらさく風よるひく
剛性をいさあそそん夢ハ丸

うん涙流して瑞ハ弘
怪世界ひ雑もあく紅ある人れ

大ハ千ハ紅海よ　乃稲
礼歓や柵　乃来せさかる

鯛火焼てあ風呂乃稲
若れをて十八ヶ所おきう

絲治乃国入結ハ釈迦
時雨ハ丸夜を去の きうる

さうなる波つさ浦ハ乃稲
祭礼を投ス夏ア乃夜書

芝居のそうふく新郎
うつの書ハ丸十二月袖嵐

ハ乃せ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ
村雨ハ空明き宿の芝居

功ス乃ハ去ハ乃ハ乃ハ
花乃遠耳ハあるて文金

風の口ハ乃ハ乃ハ乃ハ
先イ口ハ布目ハ乃ハ乃ハ

さる眼ア陶ハ乃ハ乃ハ
猿ハ乃ハ十九ハ乃ハ乃ハ

腰巾ハ乃ハ乃ハ乃ハ
小枝京眼乃ハ乃ハ乃ハ

世乃ハ銀箔乃ハ乃ハ乃ハ
ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ

本乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ

陸里七十九人　長六
梅

附句、ひくくさそふ人事の声とおもふ
せめてくハ切なる恒根の花
風ふるは蕎麦一株を我宿よ
雲ふかし　しくハ廻文乃状
我出る夕打行筆の月
絶すすきけつる夕雲の秋
ちこちて乃猪あ垂蕎
遠路を歩行て雪ちの
敵蕎乃波ちし　廻向の音
さうなふ波つき情ひ
うん涙流して孫ひ
任世彩ひ雑ひく社あ
大河千ハ紅葉よ　石橋
礼歟や柵　ふ未せきかる
舞火　焼て西風乃猫
若れを三十八ヶ不打
孫治乃国入　釈迦
腰物　夜　雪
小枝京眼乃文を
世ふ銀治乃
未戸乃　雲あ谷
付星　武句
ちやく
腰面よ　涙乃
山祇ハ
光秀
中く
俳句歌　歌海
玉和貴子
高陽句
土時調堂秋月

祭礼を後ち変つ乃交雪
芋ちこのそうふく鬱乃
たつ乃者ハ二十双袖風
紅の面れ雪世田
村面ハを宝郎き花の芋
ゆ乃ハ　ハ　ハ
猫耳よあうて雪ハ
花乃音
湖の口ハ雪ちけ乃山
名
ハイロハ布月ハ震ら那て
泥孫のちてさ夕風まひく
岡性をいさあてちん毒ハ松

字找垂りぬ梅翁ふ霞ひるるにおやくくと冠すべしと教
ける後芭蕉翁ゆゑを求て生涯支找稱嘆あ
しかりぬ元を一代れ名句といふ「古寺や蛍多ふなる垂
而仲ゝも世什古今ふ亦しと俳せり又「秋雲の法華ハ古
き云ふ」「世れ中や蝶くと風迷」彩ゝ何れ「秋ゆかすやいう
れ序王紙帳「有明の淋ぞ残る枕鮑」此句ゑとり卓絶ふと
長新古より余梅ずるふ史記巻注了清聲ハ俳諧のあしと
云さくろハ戯云找いふて人を怪ずせ世れんよ加ふ云
なり是古れ翁ゑ俳諧お扶づくふ此場ふ帳里とは扶れば
古今ふ俳諧の上ゑといふ芭蕉波の宗因と伴賀れ桃青ゑ
らでハ古ずと云俳ふ天和二年武蔵の宿給ふ移す彩年七
十有八

井原西鶴

井原西鶴ハ梅翁のつゑ大恢後林君一人ゑり一日位
吉れ社阪ふ於て獨吟二巻ゑ三千句を吐く生より二巻巻又
二巻翁とも称せふ陳松斎と号ス「我意のまゝ淡ゑ法
ぞ初度「平樓やを亦く生るゑ巻又「長崎ゑ表うくれ
ゆく衣ゞ人「鯛ハ巻ゑ見ぬ里ゑ何ゑ今日れ月「大晦日定ゑ
紀世の定ゑ余此人ゑと西学找ゑく帰る生文素人云ゑ
ゑおるゑ古ゑ巻ゑ巻す而小夜嵐一代男等れゑ紙後世ゑ
彩ゑる近代戯作者の逸ゑふ原逸雲ゑ此門ゑいゞるゑ
いひ伴ふ元禄中ふ死ス元ゑ十餘巻

椎本才麿　附　巻水

椎本氏字ハ叶文治逸ゑ人高徳翁と称すはじめ西武ゞつ

行く列武といふ人西宿の牙子なり時に西北まと西鶴
と共に梅翁の袁を受てより才麿と改めり「思ひおもく梅かつ
うー紀柳うの家「梅が香よりゆく笛や山曹子「れおうぐに咲
て雲雨ー蓑うの「春木立いうの冬ー山の雁住居いつれなる
年ふり有けん江戸へ来り「牙は居家より山を買りといつる
附句ー九里附の俳宗法海を尋て恋て思く
法海は此人なる大家なるに買山は知るに江戸なる俳諧
忍るに為らんと年の暮ー又「高士を我買うく亜りり
さーは暮法海仏ー又「鬼や角の年ー月ー山の暮士
ーて生過ぬ故ら生ーやいと雅俗といふ人ー後有生
陽り元文中八十二歳ー死きり
北條園北才麿がつ子ー必眼居士と号は生涯清ふを

ふんぶ院籍の採を守ー「ぶくと山家なる滝序「法
華ー編笠ぬが奴楽山子ふ「八幡や町小行燈の色ー月づ
宝永八年ー死辞世「れぞろく引ぶく雅の月清ー

田中常矩　附　左衛

田中常矩は京都人ー歌と号は中序桐宮源のつきり
ー往年変風ー て一流を立ー月は生地に稚く後林を
ちふる若い大抵此人の流ー いづるとふ一年五百類巻頭よ
「蛍ー灰が根の陣や巻北堂と流下て流ー灰巻雅と称ちる
又「姫瓜小三千の林檎紅色ー
父常長ー風彼行ー 東門ー て松風彩と号は「釈の杖よ
八里ー果や根麻木成ーいふ巻雅名此人の蹋ちり生ー
戒懺みー高ー子とせりー

国代松意 附 正友

国代松意は江戸の人延宝中渡治郎に住して友人正友と句を合せ談林の号を開日く小変化一字の働一句の餘情了庵人を勧誘して花筏名く談林飛龍と名く「嶽ぐや呑まの若松意海内」言葉や昔よりの人陸奥笠は肩の江に生風の何ら伝れて皆人俳諧を云ざるし是まの子と正友が功有り初め長橋籠の東に住する小野く古ふ江戸談林ちらんふるし京堂

正友も俳諧の人松意と一つが弟なり延宝の江戸へ来る松意と力を合せくるる句を談廣む「のれの種受つけぬ芸もなふ

蕉谷言改

蕉谷言改も京油屋の人何れのつよ遊ぶるを古ふ江戸時江戸小て盛んなる談林の行るるを聞おれ此も不芸して「未去者」れる武蔵の熱中なと幾句して句ら熱中なる蓮社言改と名乗る古ふ古風古俳士と年陽まもく記京「子代の松」加せり蕉の神ぐら「松尺ん小桶る泥鰌芸うのみ又一風家と称しつ居し

泄西言水

泄西云水は京都の産る花俳風云松より生れ俳諧の業義彩まと風を雲と号は元禄の頃才小震ふ生芸はる名は言語盡而意不盡可謂至妙

芭蕉の生て本橋の云水と呼れ江の山ちふ「尼寺よ俳業れ世の変る俳「子歌は久良ハ梅」俳れり「文れく委附けり京古祝「布帛く歌る人ふし芸

和歌「次は彩や人よて連は強代する変態不一大年可知後江戸人
者くに江戸俳諸を著し祇なくく流く俳く紀曲集幾拾ふ享
保七年九月廿七十有三にて歿る門人舎羅一本林の句碑
ふく墓碑ふ詠すといふ

伊藤伝徳

伊藤伝徳神名宗尚桃林園と号す京洛に居して和及我
思等と同夜和合して俳諧に化するより化する方一といふ
或曰東武蕉窓より文を縫く上総の風俗いうんを学ふ
彩芭蕉人敬繁と称で沼数斗よ如ぶ異ふ家ふ一句を作て
ふく答ふ一雨は月やつはけくふ行ばくと京紗知ぬ
「義士に流ふ三月七日八回ふ赤古今題芙蓉作無出雲篇右者可
絶逸」名月や今宵ふ限ふ流ふ子ふとなふん哥ふいはくいちまひの

雪や人は世の中といふる歌意知ふ是ハ今年就中揚先師と
白氏の年を数ふる心ふ吐ひて老の涙を流ふ
も至楽言るき芭の林ふ赤一昭言て太祖ふ流し神世周「忍
や女ふ眼流ふ」は言みふふく通すふ或出ふいふまの子
幼ふる附ふ義ふ身ふ義ふこの才を聖し洋すふ徳は一字を
伝て義双して後い西武梅窓ふ従ふく学ぶ武ふ一向ふ
盛流ふとせりと中年志ふく後林の徒ふ楽して河父ふ
仲を変ふ暁年眼を開いて正風ふ帰するとなん享保七年
十一月六十有餘にて歿す

墨め　附 雅中

墨めを学ふ松坂の人生質和奇を好て風流ふり俳諧すと
英津め城ふこふく生徒ふ「ふる「義ふふく」や古園梅の

樵翁同時晋子が山蔡の事と異曲同工不知何先生を訪ひ
扨ゆく春の暮木々の梢一頁さくらかな墨くろ「有種
北伊達為平」て紙子う京見笠旨女流の興象ほく称すべ
嵯峨に於て紙ちく浪花る稼るに初て生涯こふる
或時蕉窓彷徨して来るを咲するかな清拙く窓寂す窓
主めの敬恭うく礼所を感じて「必菓や見ん方くつみる
麋こもの」主め探して「孔撫ふ北流北野身宿丈外」て
より京武人下里窓了隨侯す翁又晋子よ依く
陸奥ぶ一年稼ちく京洛を遊逸し後江戸へ逗里深川よ生
伯して眼科を沼く男の達とる支人琴風ら記よいちく此女む
ーちり世事に踏く被下宮子弦の芭蕉を別く
張文庫北蓋紙ちを水ちふ「ふ閑るちんど特ち沼りくを

支紀子も風雅のうへ北興ちを平生ちし紙沼佛道よのく
天窓北名ちれど主中を十筋ばうり殘生ちを可笑ーち
ー惟一思むりー城忍る成庫ー形のぬき若ゆ人禄理も信庫
せーうや句ら雲虎和尚よ答ふ出うる
来出の結拙尺中は不求主不忘い大庫宮根源達を好ず
陸而悔ふ弥ふ弥ふ心源弱よとての而低柳を繰り花ハ
子ね惟その俗ーて庫ふ句をいひ奇殘綴く逝中れるりよん
堂益北に業ちく一切種ち堂益の口業よてん法臭紙ハ
嬢に「我平白ちい主仏と句と奇とちり極楽人妙を
より地獄く落るい国出ちく和歌白己意具不覓心清
燈已燈一燈心市中默ー有明鏡全識人肉清浄心「達ち尺ん達
ち知庫紀嘗ー何ふぶ堂ふもあ奴法北ちり出

宗長紀行すべて此のぬし一と享保八年六十巻うして名残知読と改め冠里公名母君仕人同く十一年四月六十有三うして死る辞世「秋は月雲の曙ぞ」しるべ名の義か歌ゆ荀葉の孫地仏

岡西氏いまの俳諧名人はじめ金一つ学ぶ一有とのひ後梅翁

ゆ俳てより性中と改む一時軒と号す「主元や松よはじ名をて

喜は月「とく義くぞる人俳せ山橋ゑうせ旅行襲了遠く

「常右しいまぐ旅ゑる夜ぐく壮業より鬢を業うして雑波よ

遠ぞり又出我舟して生名蹴るゆ元孫ゑ年よ双に

上方鬼貫

上方鬼貫は摂州伊丹の人社稷を紀く浪華よ遠ぶ家多うて

資用ゆ乏し一或人その一女我権貴は妾よ奏んゑ我すべゆ義を

ゑく此を園辞す生性の厳正なる大率初のぬし拙る我或也

為つ浪華と悪事をけくゆ死又ちゆ亡此名法舎を財ぐ家ゑと

いるゆ大いを俳妄俳ゑり勢ゑ俳諧を重形よ俳ゆんで

鬼貫とゆふ元孫京保は百本山と屠行して名円牙よ此ゆ

或樹孫元我一問せ下此く「庭おゆゆ咲くる山葉ゆ芭蕉

的機孫何滅桐樹子し法意のんを「泄ちー泄ちーつく寝ぬ歌ゆ

然情歌面裏いまくを多俳ちゆと云れり「ゆよゆは里と秋の

元方俳ゑ士は山此句雄澤得李青蓮風骨「夕方の又や何変よ

下結はゆ「行水の捨而ちー出ゆ子戸「麦ゆ味や嫌ゆ湯をより

頬ゆふ足「物すどやゆゆ面白は俳名天性軽薄うして虚弦ゆ

隔ゆ人名よ詔語するゆ知ぬだし貴はゆ司泥ていく

已二十ゆ海ぶる法先ゆ松江の寂と梅寂到庭の舎よおるゆ

「ちよとゆふハ迫死も生ー右壮山とゆふゆるよ「鶯に新を下て

ばらくと附くり軸筆より古雅山より転るの石ほとやと名られ
尚戒して古雅山谷の壁戒ほ稱といく雅名ほけく在たるり
ほといつる古奇ほりと物云いはとこれ云ふ〳〵名家をなぜむ
くい彼云自法作るる劣らぬ戈力感ずるに篠ほり扱さを此子
業成くる業ほ下るの御者を徒るの下宜ふるるふ侍和法
ほ元祖〳〵法る成一年誠の紀賀よて蕉翁の行脚するに逢て
「なるく拙と知れば学るし神おく至晩年嘱こ至居士印名も
称きり元文三年ふ終法

小西来山　附　宝平

小西来山ほ〳〵法師といふ来山晨祖懐の産生ふり父母を失ひ
祝拾ほ為る養育せ〳〵法ふ為る他の戒勤めず民出戒法ほを
好む時る宝平清く祖て弟子とちに生慧敏るるつを学く

十戒時法齢いすく二十一ふ〳〵に事を去く伺家とある十等
雲と号す中禁法林の翻楚る一て古今よ名戒法し達人ふり
「元因やほれば跡門ほ水の書興象蔚美「三味線を小奇も此
らに拙名を精確を書しつていむしつてへ捨はるほ至困めう表
ほ什ふ形る及ずに「蓋嘆く死とも古いに病ふふ法名部花「反
門や叶で足ふく時あ至「涼ほふ田橋を田川流里ノ二句見法
可称合作「子嵩如れく情子ひ月ふり蒲山いはく林間一声
繊兩時来此時是景可想「雨戸ふに秋の姿や灯ふ狂ひ金氣錚
錚「松ほ之校る掛くりはつ〜たり来興自在「神来之田門
ほるそふ秋と成ふ里蕭山いく以温雅し調寓悲憤し思泉
為傑作「我ぬく戒蓋ほげく尺る寄ほふ名天凄法法と
女人形の紀すふ形るもほ句ほり深田子の紀ふ嘉此女人形八長

313
23

尺ばかり座して拠息ふかく体今永紀十年雲子秘す体
といふ蓋し西窪福徳を出多き事といへども此奥ゞ奇巧
にて古今我綜猶す体ゞ如ぎ物ふ及ぶすに要するに西山の一流
此人出てより後世ゝ大風きりるぶ座し
前川田平を相家のつゝて来山ゞ洞右年親よひて
自入と改称を作多く尺ば「恰や三分ば身はく今日の海「山姥
ゞ乗らぬ山や雲ば罪宮永中体ぼの玉ゆ脱る及に

依家高人淡嵩ゝ上絵

終